

# 支援を必要とする児童に対する体育指導

## － 運動が苦手≠体育嫌い －

生島嘉人

(東海学院大学短期大学部)

### 要 約

近年若年者のスポーツ離れが進んでいる。人生においてスポーツに関わる始めのきっかけは、学校教育における体育であることが多い。幼少期の頃は身体を動かす事を楽しいと感じていたが、年齢が上がると体育に対し好き嫌いの差が大きくなる。学習指導要領における体育指導に着目し、体育嫌いは指導法が実技重視になっている事が一因と仮定し、バスケットボールの指導法を例に検証した。検証の結果、実技評価が成果主義になっている事が多く、その為「できない＝嫌い」の思考が成り立っていた。本研究では成果主義だけではなく、心理的側面や ICT 教育等を参考に体育に対し苦手意識が軽減される指導法を検証していく。

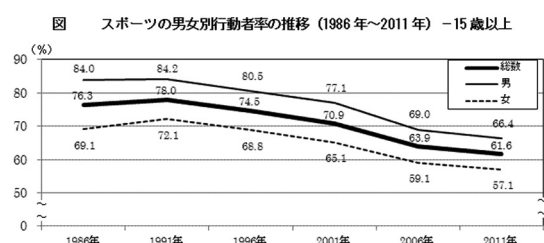
キーワード: 体育 学習指導要領 ICT

(2020.12.9 受稿 査読審査を経て 2021.2.5 受理)

### はじめに

#### 研究の背景

昨今、20 代 30 代の若者のスポーツ離れが進んでいるという報告が見られる。2011 年秋に実施された総務省の調査によると、約 20 万人の 15 歳以上を対象に行ったスポーツを過去一年間にしたかどうかの調査では 1986 年の調査に比べ、約 15%も減少したことが分かっている(図: スポーツの男女別行動者率の推移参照) <sup>i</sup>。



資料: スポーツをした人の割合の推移 (総務省統計局)

これに加えて、子どもの体力も昭和 60 年から低下傾向にある。

日本経済新聞のインタビューで総務省の三神氏は、若者のスポーツ離れ<sup>ii</sup>の背景としてゲーム機器の普及などの娯楽の多様化を原因としてあげている。政府はこのような若者のスポーツ参加機会の減少を受け、『若者のスポーツ参加機会の拡充や高齢者の体力づくり支援等ライフステージに応じたスポーツ活動の推進』を定め、国民の誰もが、それぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでも安全にスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会の実現に向けた環境の整備をスポーツ基本計画の策定によって、推し進めてきた<sup>iii</sup>。現在は第 2 期スポーツ基本計画も折り返し地点を丁度迎えている。この中でスポーツの役割の重要性を指摘している。「スポーツの「楽しさ」「喜び」こそがスポーツの価値の中核であり、全ての人々が自発的にスポーツに取り組み自己実現を図り、スポーツの力で輝くことにより、前向きで活力ある社会と、絆の強い世界を創る。」としている (文部科学省、2017 ; p3) <sup>iv</sup>。

若者のスポーツ離れと政府による政策が話題になる中

で、スポーツに親しむ機会であり、基礎となるのが体育であると考え。義務教育下で実施される体育は幅広いスポーツに触れることができ、種目ごとのルールを学ぶのみならず、協調性を身につけたり、戦略を練るなどの論理的思考を身につけたりすることにも役立つよう指導法が熟考されている。しかしながら、体育を苦手だと考える児童も多く（表：体育好き・嫌いと得意、苦手の関係参照）<sup>v</sup> その役割と意義を発揮しきれていないまま「出来ない＝嫌い」もある。

表 体育好き・嫌いと得意、苦手の関係（対象者 2,724 人）

	好き	中間層	嫌い	合計（人）
得意	1,563	63	3	1,631
中間層	403	169	8	580
苦手	122	210	181	513
合計（人）	2,088	444	192	2,724

上記のアンケート調査にあるように、体育が好きだが、苦手と思う児童も少なからず存在し、必ずしも運動が苦手な児童が運動嫌いではなく、集団で行う体育が苦手や他者と比べられる体育が嫌いという意見もある。

## 研究の目的

本論文では、教科としての体育の現状を整理し、体育嫌いへの対応策を検討し、新しい指導法として ICT の活用を提案したい。

## 第 1 章 体育指導とは

### 第 1 節 学習指導要領における体育科とは

平成 29 年 3 月 31 日に文科省では学校教育法施行規則の一部改訂と小学校学習指導要領の改訂を行い、令和 2 年度より新小学校学習指導要領等が全面的に実施された。今回の改定の主な経緯としては、人工知能（AI）の飛躍的な進化を背景に、学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらすのではないかと予測が示されており、「“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすこと」（文部科学省、2017；p2）<sup>vi</sup>とされた。中央教育審議会答申ではさらに各教科の改善事項も示しているが、体育科、保健

体育科における現行学習指導要領の成果と課題については、次のように示されている。

生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健との一層の関連や発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ、指導と評価の充実を進めてきた。その中で、運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めが掛かったこと、『する、みる、支える』のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、責任、健康・安全等、態度の内容が身に付いていること、子供たちの健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身に付いていることなど、一定の成果が見られる。他方で、習得した知識及び技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること、子供の体力について、低下傾向には歯止めが掛かっているものの、体力水準が高かった昭和 60 年頃と比較すると、依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。また、健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要との指摘がある（文部科学省、2017；p5-6）としている。改訂には基本的な考え方や改善の具体的事項も示されているが、その中でも注目すべきは「運動の楽しさや喜びを味わうための基礎的・基本的な『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』『学びに向かう力・人間性等』の育成を重視する観点から、内容等の改善を図る。また、保健領域との一層の関連を図った内容等について改善を図る」（文部科学省、2017；p7）であり、『全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができる』ことが強調されている点である。また、「生涯にわたって運動に親しむこと」が「現在及び将来の生活を健康で活力に満ちた楽しく明るいものにすることが大切である」（文部科学省、2017；p9）としている。

このように、新学習指導要領では運動を楽しむことが、生涯を通してスポーツと関わっていくことにおいて重要であるという見解が示されたと言える。

## 第2節 体育指導の方向性

新学習指導要領の改訂に合わせ、体育指導の方向性も示されている。まず、体育については、「体育の見方・考え方」を働かせて、資質・能力の三つの柱を育成する観点から、運動に関する「知識及び技能」、運動に関する課題の発見・解決等のための「思考力、判断力、表現力等」主体的に学習に取り組む態度等の「学びに向かう力、人間性等」に対応した内容で示した上で、豊かなスポーツライフを継続することができるよう、小学校、中学校、高等学校を通じて系統性のある指導ができるように、引き続き指導内容の体系化を図ることとした（文部科学省、2017；p10）。また、指導内容に関しては発達の段階のまとまりを踏まえて、体育科で求められる資質・能力を育成するためには、「カリキュラム・マネジメント」及び主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進することが重要であるとし、系統性を踏まえた指導内容の重点化を推進している。

## 第2章 具体的な事例紹介

平成 29 年にスポーツ庁によって実施された『平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査』では、小学校、義務教育学校前期課程及び特別支援学校小学部の 5 年生全員を対象として、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20m シャトルラン、50m 走、立ち幅とび、ソフトボール投げの実技テストが行われた。この結果によると、平成 20 年度にこの調査が開始されて以降、小学校 5 年生、中学校 2 年生ともに男子は横ばい傾向、女子は向上傾向にあるということが分かっている。なお、女子は平成 20 年度の本調査開始以降で最高値という結果となった。しかし、昭和 60 年度の調査結果と比較すると、小学校 5 年生の反復横とび及び中学校 2 年生男子の 50m 走を除き、児童生徒の半数以上が昭和 60 年度の平均値を下回っているという結果になっており、ボール投げについては、特に小学 5 年生の割合が低く、また、平成 22 年度以降においても、小学校 5 年生、中学校 2 年生のいずれも低下傾向にあるということが分かっている（文部科学省、2018）<sup>vii</sup>。

このように昔と比較すると身体的な能力は依然として低い傾向が見られる。

工夫や変容されたスポーツの指導例のうち本論では、小学校から取り入れられ、中学校や高校でも取りあげられ幅広く普及している、体操競技（学習領域名は器械運動）、球技（小学校の学習領域名はボール運動）、水泳競技、陸上競技（小学校の学習領域名は陸上運動）の 4 スポーツを対象を限定し、現行学習指導要領に示された球技種目は小学校では、バスケットボール、サッカー、ソフトボールの 3 種類の中で全身運動であるバスケットボールを実施することが義務教育下にある児童に与える身体的な影響について本章では検討したい。同時に、チームスポーツというバスケットボールの特徴が与える精神的な側面も本章ではみていく。

## 第1節 体育におけるバスケットボール

成瀬によって「球籠遊戯」を指導したことが授業の一環としてバスケットボールが取り入れられた最初になるが、バスケットボールを教材として研究する試みはこれを皮切りにどんどん進められている。小野泉太郎の「毬籠」<sup>viii</sup>、佐竹郭公の「女学生とバスケットボール」<sup>ix</sup>、日本体育会の『新撰遊戯法』<sup>x</sup>、白井規矩郎の「Basket ball」<sup>xi</sup> および『体操と遊戯の時間』<sup>xii</sup>、松浦政泰の「女子遊戯バスケットボール（籠球戯）」<sup>xiii</sup>などの規則を中心とした研究に続き、川井和麿編集の『実験新体操遊技』<sup>xiv</sup>、佐々木亀太郎・高橋忠次郎の『競争遊戯最新運動法』<sup>xv</sup>、高橋忠次郎・松浦政泰の『家庭遊戯法』<sup>xvi</sup>、坪井玄道・可児徳の『小学校運動遊戯』<sup>xvii</sup>、晴光館編集部による『現代娯楽全集』<sup>xviii</sup>、上原鹿之助編集の『実験ボール遊技三十種』<sup>xix</sup>、渡辺誠之の『最新ボール遊戯法』<sup>xx</sup>などの教科教育のテキストに類する文献がある。

バスケットボールが体育の授業の一環として組み込まれたのは、大正 15 年の学校体操教授要目に採用されたことから始まる。その後、バスケットボールは学校体育指導要綱と学習指導要領において採用が続いてきている。小学校においては、小学 3 年生と 4 年生でまずはバスケットボール型ゲームを実施し、小学 5 年生と 6 年生でバスケットボールを実施するとなっている。中学校では 1 年生から 3 年生の全期間を通してバスケットボールの実施が組み込まれている（文部科学省 HP より）。

バスケットボールが体育に組み込まれている理由とし

て生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成する観点から、攻防を展開する際に共通して見られるボール操作などに関する動きとボールを持たないときの動きについての学習課題に着目し、その特性や魅力に応じて、相手コートに侵入して攻防を楽しむ「ゴール型」(文部科学省、2008)<sup>xxi</sup>であるとしている。千葉県教育委員会では、バスケットボールの特性を「パスやドリブル、シュートなどを駆使し、集団的な技能や戦術などを競い合うことや作戦を立てて勝敗を競い合うところに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」(千葉県教育委員会、online)<sup>xxii</sup>と述べている。

また、授業で重視される技能の習得は、第1学年及び第2学年では、攻撃を重視し、空間に仲間と連携して走り込み、マークをかわしてゴール前での攻防を展開できるようにする。指導に際しては、ゴール前の空間をめぐる攻防についての学習課題を追求しやすいようにプレイヤーの人数、コートの広さ、用具、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れ、ボール操作とボールを持たないときの動きに着目させ、学習に取り組ませることが大切である。「ボール操作」とは、手や足などを使ってボールを操作し、シュートやパスをしたり、ボールをキープすることなどである。シュートは味方から受けたボールを得点をねらって相手ゴールに放つことである。パスは味方にボールをつなぐことである。キープはボールを相手に奪われないように保持することである。指導に際しては、ボール操作は、相手や味方の動きをとらえることが重要となるため、周囲を見ながらプレイさせることが大切である(文部科学省、2008)としている。

## 第2節 バスケットボールの指導

ゴール型ボール運動として代表的な種目として組み込まれているバスケットボールであるが、ここではまずバスケットボールの指導という面から身体的・精神的な影響を分析する。

### 第1項 教材特性

まず、バスケットボールは他のゴール型ボール運動と比較すると原則的に身体接触が禁止されているという特徴がある。また、サッカーやハンドボールと比較すると、

コートが狭いということもあり、身体的な能力の差、特に走力の差が実施する際への影響になりにくいと言われている。また、「ボールコントロールすることはもちろん、相手や味方の動きを把握し、それらに対応した素早い身のこなしが必要となるため、巧緻性、敏捷性、スピード、全身持久力を高めることのできる運動」(千葉県教育委員会、online)である。

加えて、オフENSEの時には安定したボールの保持も可能なため、チームで戦術を組み立てやすいという特徴もある。一方で、身体接触が禁止されていることもあり、チーム戦術を無視して、個人プレーの戦術を学習する可能性もあるというマイナスの側面もある(松本ほか、2017: 379-380)<sup>xxiii</sup>。そのため戦術学習の効果的な構築が求められているといえる。

### 第2項 指導上の問題点

バスケットボールには以上のような指導的特徴があると言えるが、現状の体育授業でのバスケットボールにおける戦術学習の扱い方とその問題点は次のように指摘されている。

一般的に体育において、丁寧な指導法としてよく採り上げられるのが、系統的な指導である。バスケットボールで言えば、慣れの運動(ボールハンドリング等)、個人技能(シュート、パス、ドリブル等)、部分練習(2対1、3対2などのオーバーナンバー等)、そして、最後にゲームという順に指導をするという系統性である。その中でも戦術学習という観点で重要になるのが、部分練習のところであり、ここでボール非保持者の動きを学び、ゲームに生かそうとしている。ボール非保持者の動きは、それ自体は非常に簡単で走ること(歩くこと)さえできれば、誰にでも取り組める課題として認識され、球技が苦手でもうまく参加できない生徒にも取り組めるものと学習指導要領でも推奨している。このボール非保持者の動きを考えることが戦術学習へと繋がり、更に言えば、思考・判断の具体的な課題になると考えられている。

さて、このようなやり方は論理的には、明快で分かりやすいものである。この方法で、ゲームまでうまく授業を作れることもある。しかし、この系統性で指導を行うと問題が出てくることが多い。一番の問題は、個人練習、



部分練習で行ったことがゲームに活かせないということである。個人練習で行ったこと、例えば、チェストパスなどの最も基本的な個人技がゲームになると出てこない。また部分練習で行った動き、例えば、オーバーナンバーで学んだボール非保持者の動きも全く活かせない。ましてやゲーム中オーバーナンバーがいつ出現するのか分からないため、ゲーム中のオーバーナンバーを認識すらできない。本来、動き自体が簡単で誰にでも取り組みやすい技能であるが、最終目標であるゲームにおいては、学んだことが全く活かせてない状態になってしまう。(松本ほか、2017 : 380)

ここで指摘があるようにいかにゲーム中で習得したスキルを活かすかは状況判断力を培うことが必要であると考えられる。また、バスケットボールのように展開の早いスポーツであるからこうした状況判断力を磨くことも可能だといえる。千葉県教育委員会でも、「攻撃の際、ゴール前の空いている場所に走り込む動きやフォーメーションなどによる空間を作り出す動きが重要となるため、ゲーム展開を予測する判断力を養うことのできる運動」と述べられている。また、中島ほか(2017)<sup>xxiv</sup>では、こうしたバスケットボールでの実際に状況判断力の指導方法についての研究を行っており、プレイ選択の正確性と意識範囲の拡大が状況判断の各過程に作用し、的確な状況判断を下す支えとなり、正しい攻撃的戦術行動が促されるということが分かっている。

### 第3章 体育指導における具体的な支援策

これまで植屋(2000)の研究でも指摘されてきているように「体育の授業で行う運動が『うまくできる』か『できない』かで『楽しい』か『楽しくない』か、体育の授業が『好き』か『嫌い』かも決まってしまう。それゆえ、小学校体育で重要なことは『楽しい体育』の実践、提供である」(p87)と言われてきた。体育嫌いの発生には①各種運動の技能を養い、記録を高めることができるといった技術論が伴った競技志向的な目標に代わる状況②教師の資質不足、指導力不足によって発生してきたことが指摘されている(植屋、2000 ; p87)。本章では、体育嫌いへの具体的な支援策として、精神的な側面の指導と身体的な側面の指導をまずみていく。

### 第1節 体育嫌いに対する支援方法

体育による効果を最大限高めるために必要な要素とは何かについて本節では検討した上で、具体的な支援策を提案したい。

精神的な側面の指導について

精神的な側面で、状況判断力についてやチームとして戦術を立てることの重要性について言及したが、これを可能にするためには、チームとの協調、気配り、コミュニケーションといった基本的な人間性が必要とされているといえる。これらを自覚させるためには指導者による評価が必要であると考え。「誰が」「どのような状況で」「どのような判断」を下してプレイしたかについて指導者から生徒に問いかけを行い、その場合の改善策を提案、実施することが必要であると考え。また、バスケットボールに限ったことではないが、勝敗のあるスポーツであるということもあり、「スポーツマンシップ」とは何かについても理解できるよう促すことが大事である。他のゴール型運動と比べ、身体的接触がない分、これも取り組みやすいと考えられる。個人プレイに走るということもこうした勝敗への固執に関係しているということが考えられる。勝利至上主義とは簡潔にいうと勝つためにはどんな手段、行動、作戦を使用してもよいのかということである。

スポーツの定義の中に競争というものを含むのなら、勝利を求めないと、その競技はスポーツではなくなる。ここで問題となるものは勝利よりも優先されるものがあるのかということである。川谷(2005)はスポーツマンシップについて、「私をもっとも基本的なスポーツマンシップと考えるのは、勝利の追求です(ここでは、暫定的にルール遵守を前提としてもよいです)。「勝利を追求しない競技者」という概念は「丸い四角」という概念と同じように矛盾しており、したがってそんなものは存在することができません。」<sup>xxv</sup>と述べている。現在の私たちのスポーツでは勝利が第一優先されてしまっていて、勝利の価値が倫理あるいは他の価値、例えば、競争自体を楽しむ行為、他者の尊重、敗戦から何かを学ぼうとする姿勢などより優先されすぎると様々な倫理的問題が生じてくる。それはスポーツ以外、社会に原因があることがほとんどである。

身体的側面における指導については、基礎練習がきちんと応用に繋がるのが重要であると考え。一般的にバスケットボールの授業の基礎練習では、ハンドリング、ドリブル、シュートの技術が身につく内容になっていると言えるが、指導者は素質、傾向、能力を見定め、それを生徒と共有した上で、まずは自らの運動能力を最大限活かしたプレーができる戦略を理解させることが重要である。それに加え、より技術を高めたい能力を自らで考え、チームの中でどのように発揮することができるかを検討させる過程を提供することが大切であると考え。

文部科学省（2017）では、「豊かなスポーツライフの実現を重視し、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方や関わり方を共有することができるよう、共生の視点を踏まえて指導内容を示す」（p11）としており、「走・跳の運動（遊び）」及び「陸上運動」については、児童の実態に応じて投の運動（遊び）を加えて指導するなど、楽しく身体を使う指導を追加している。

また、体育実技でのつまずきは身体能力に関わらず、恐怖心などの気持ちの部分に左右されることがある。例えば、鉄棒運動は、多種多様な技に挑戦し、自分の技の種類を増やしていける喜びや楽しさがある一方で、「怖い」「痛い」というイメージからなかなか技を習得できないということがある。今回はかかえ込み回りで、鉄棒がお腹にあたってしまうことが痛いとすぐに止めてしまう子どもへの指導について考えたいと思う。

お腹が痛いと感じる理由としてまず正しい位置で体を支えられていないということが考えられる。そのため、ツバメ姿勢や前回り下り、ふとん干し姿勢、かかえ込み（ダルマ）姿勢のときに痛くない位置（へその下のあたり）で支えることができるかを確認してあげる必要がある。

それぞれの指導方法としては、

- ① ふとん干しじゃんけん ふとん干しの姿勢を保つ練習をじゃんけんゲームを交えながら行う。この際に痛くない位置に修正をしてあげて、楽しみながらその姿勢を保つことで鉄棒にお腹をつけることへのマイナスのイメージを軽減してあげる。

- ② ダルマ姿勢でブランコ ダルマの姿勢で足を曲げ伸ばしすることで、ブランコのように揺れる。ポイントとしてはかかえ込み回りと同様に、揺れるときに肘が鉄棒から離れないようにアドバイスする。
- ③ お手伝いかかえ込み回り ダルマ姿勢を大きくしていくとそのまま回転に繋げることができるので、鉄棒の下から手を伸ばして背中を押してあげることで回る練習をする。曲げ伸ばしのタイミングを掴めるようになれば、一人で回り続けるのもできるようになる。
- ④ 一人で抱え込み回り 最初の一回目の勢いは先述の曲げ伸ばしのタイミングである。揺れの頂点の少し前に曲げたり、伸ばしたりするのを横で伴走をつけてあげてタイミングを覚えてもらう。<sup>xxvi</sup> 姿勢ができていても痛い場合には補助具を用意し、痛みを緩和するなどの工夫も必要である。こうした段階を踏んだ指導を行うことで、少しずつ苦手意識を和らげ、習得につなげる。

## 第2節 新しい指導方法としての ICT 活用

新学習指導要領の改訂の背景として指摘したように、現在急速に人工知能が広まり、IT 化の波が押し寄せている中で、指導においても ICT の活用は必要不可欠となってきた。文部科学省ホームページ「学びのイノベーション事業：実証研究報告書」によると、児童生徒の意識について次のような報告がなされている。

- ・「楽しく学習することができた」「コンピュータを使った授業は分かりやすい」など、約 8 割の児童生徒が 3 年間を通じて、授業について肯定的に評価している。
- ・「コンピュータを使って発表したい」「自分の考えや意見をわかりやすく伝えることができた」が、他の項目と比較して低い数値であるが、経年で向上していく傾向が見られる。
- ・全国学力・学習状況調査により全国と実証校の状況を比較すると「コンピュータや電子黒板を使った授業は分かりやすい」「本やインターネットを使ってグループで調べる活動をよく行っている」が、特に全国より高い数値となっている。<sup>xxvii</sup>

また、仙石・市川・野村（2000）では、インターネットを利用した水泳学支援システムの導入について検討している。具体的には水泳学習支援ホームページを作成し、授業時間外に水泳学習の予習・復習教材として児童が自主的に活用できるものであった。その結果、6割近い児童が「泳ぎ方の勉強に役立った」と回答しており、新しい知識の獲得に活用できたことを示唆している。

また、あいち健康の森健康科学総合センターでは経済産業省平成27年度補正予算「IoT推進のための新産業モデル創出基盤整備事業（企業保険者等が有する個人の健康・医療情報を活用した行動変容促進事業）」の採択を受け、糖尿病患者等を対象とした実証研究を行っている。これでは、ウェアラブル機器からの情報を活用して“七福神”が応援する楽しいアプリを開発し、この七福神が、各対象者の状況に応じて、「激励」、「促し」、「注意喚起」を行うなど、楽しみながら健康増進につながる仕掛けを組み込んでいる。こうした楽しみながら健康促進していく技術は体育などの授業にも応用は十分可能だと考える。

ICTの活用で、算数、社会、理科においては高い教育的効果が得られており、苦手克服に対する成果が上がっている。本研究で明らかになった「体育の苦手意識が、能力や技術だけではなく、集団行動や他者との比較も要因とするならば、ICTを導入することで、個別指導および自身の振り返りをする事ができ、技術や能力以外の面でのデメリット克服の指導法と考える。しかし、ICTの普及においては、まずインフラ整備が必要とされているといえる。

## おわりに

多くの人は健康に対する漠然とした不安は持っているものの、病気になればすぐに病院にいける環境下の日本では、健康な期間は、具体的な予防・健康管理に無関心な人が多い。また、高齢者に新しい生活習慣を取り入れさせることも困難である。こうした中で、体育が豊かな人生を送る上で、健康・人間性を養うのに大きく貢献していくことは言うまでもない。しかし、本論文でも明らかになったように、体育嫌いになる児童は多い。こうしたことから、時代の流れに即した新たな指導法によって

体育を楽しむ仕組みづくりがより促進されていくことを期待したい。

## 参考文献

- 1:総務省統計局（2014）『スポーツをした人の割合の推移』総務省統計局 HP、最終更新 2014 年 1 月 20 日  
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi642.htm>
- 2:日本経済新聞（2012）『20～30代で顕著 若者のスポーツ離れ、なぜ進む？』日本経済新聞、2012 年 12 月 4 日掲載  
<http://www.nikkei.com/article/DGXDZO35988060Y1A021C1W14057/>
- 3:中央教育審議会（2012）『今後 5 年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策』『スポーツ基本計画の策定について』文部科学省
- 4:文部科学省（2017）『スポーツ基本計画』  
[https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656\\_002\\_300000714.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002_300000714.pdf)
- 5:文部科学省（2017）『【体育編】小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_010.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf)
- 6:スポーツ庁（2018）『平成29年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について』文部科学省
- 7:小野泉太郎（1902）『毬籠』日本婦人、（31）：20-22
- 8:佐竹郭公（1902）『女学生と「バスケットボール」』毬籠』女学世界、2（9）：110-116
- 9:日本体育会編（1903）『バスケット、ボール 新撰遊戯法』育英舎、pp71-75
- 10:白井規矩郎（1903）『Basket Ball』婦人界、2（4）：144-150
- 11:白井規矩郎（1910）『バスケット、ボール体操と遊戯の時間』啓成社、pp818-837
- 12:松浦政泰（1905）『女子遊戯 バスケットボール（籠遊戯）』女学世界、5（12）：161-166

## 引用文献

- i 総務省統計局 (2014)『スポーツをした人の割合の推移』総務省統計局 HP、最終更新 2014 年 1 月 20 日  
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi642.htm>
- ii 日本経済新聞 (2012)『20～30 代で顕著 若者のスポーツ離れ、なぜ進む?』日本経済新聞、2012 年 12 月 4 日掲載  
<http://www.nikkei.com/article/DGXDZO35988060Y1A021C1W14057/>
- iii 中央教育審議会 (2012)『今後 5 年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策』「スポーツ基本計画の策定について」文部科学省
- iv 文部科学省 (2017)『スポーツ基本計画』  
[https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656\\_002\\_300000714.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002_300000714.pdf)
- v 鹿児島県総合教育センター 平成 26 年度長期研修研究報告書、鹿児島市立草牟田小学校 教諭 五代 孝輔
- vi 文部科学省 (2017)『【体育編】小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説』  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_010.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf)
- vii スポーツ庁 (2018)『平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について』文部科学省
- viii 小野泉太郎 (1902)『毬籠』日本婦人, (31): 20-22
- ix 佐竹郭公 (1902)『女学生と「バスケットボール」(毬籠)』女学世界, 2 (9): 110-116
- x 日本体育会編 (1903)『バスケット, ボール 新撰遊戯法』育英舎, pp71-75
- xi 白井規矩郎 (1903)『Basket Ball』婦人界, 2 (4): 144-150
- xii 白井規矩郎 (1910)『バスケット, ボール体操と遊戯の時間』啓成社, pp818-837
- xiii 松浦政泰 (1905)『女子遊戯 バスケット, ボール (籠遊戯)』女学世界, 5 (12): 161-166
- xiv 川井和麿編 (1901)『籠毬』実験新体操遊戯秀英舎, pp 6・8
- xv 佐々木亀太郎・高橋忠次郎 (1903)『バスケットボール競争遊戯最新運動法』藜光堂, pp51-53
- xvi 高橋忠次郎・松浦政泰 (1909)『バスケット, ボール家庭遊戯法』博文館, pp170-176
- xvii 坪井玄道・可児徳 (1909)『バスケットボール小学校 運動遊戯』大日本図書, pp94-101
- xviii 晴光館編集部編 (1910)『バスケットボール現代娯楽 全集』晴光館, p998
- xix 上原鹿之助編 (1910)『バスケットボール実験ボール 遊技三十種』平本健康堂, pp21-28
- xx 渡辺誠之 (1912)『競技的バスケット, ボール最新 ボール遊戯法』研文館, pp185-216
- xxi 文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 保健体育編』  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912\\_009.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf)
- xxii 千葉県教育委員会『【球技】(ゴール型: バスケットボール)』  
<https://www.prefchibalg.jp/kyouiku/taiku/gakutai/jugyou/tenkai/documents/6tyuukyuuugilpdf>
- xxiii 松本真, 古田久, 菊原伸郎, 細川江利子, 有川秀之, 野田寿美子 & 野瀬清喜 (2017)『初等中等体育の指導における実践的課題』< 教育科学 埼玉大学紀要 教育学部, 66 (2), 377-400
- xxiv 中島友樹, 佐々敬政, 筒井茂喜 & 後藤幸弘 (2017)『小学校高学年児童を対象とした状況判断能力を高めるバスケットボールの授業実践事例』スポーツ教育学研究, 37 (1), 19-31
- xxv 川谷茂樹 (2005)『スポーツ倫理学講義』ナカニシヤ出版
- xxvi 清水由 (2015)『気になる子の体育 つまづき解決 BOOK : 授業で生かせる事例 52』学研教育みらい p56-57
- xxvii 文部科学省 (2015)『学びのイノベーション事業 実証研究報告書』  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/detail/1408183.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1408183.htm)

Physical education guidance to a  
child who needs support  
— The person who doesn't like  
movement isn't always a physical  
education hater —

IKUSHIMA Yoshito